
廃病棟 ~ Abolition ward ~ 1 s t

Leo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廃病棟 Abolition ward 1st

【Nコード】

N7204G

【作者名】

Leo

【あらすじ】

私は、天使に出会った。怯えきった患者の緊張を慣れたように解す、正に理想の母、ヴァージン・マリア。けれど、幼い頃の記憶を探る内に、彼女の抱える過去へと繋がっていく。

それは、甘い永遠のようで「1/2」(前書き)

聖母哀傷 ヤーコポーネ・ダ・トーディ 作

悲しみの母は立っていた
十字架の傍らに、涙にくれ
御子が架けられているその間

呻き、悲しみ
歎くその魂を
剣が貫いた

ああ、なんと悲しく、打ちのめされたことが
あれほどまでに祝福された
神のひとり子の母が

そして歎き、悲しんでいた
慈悲深い御母は、その子が
罰「苦しみ」を受けるのを目にしながら

涙をこぼさないものがあるだろうか
キリストの母が、これほどまでの
責め苦の中にあるのを見て

悲しみを抱かないものがあるだろうか
キリストの母が御子とともに
歎いているのを見つめて

その民の罪のために
イエスが拷問を受け
鞭打たれるのを（御母は）見た

愛しい御子が
打ち捨てられて孤独に死に
魂へ帰っていくのを見た

さあ、御母よ、愛の泉よ
私にもあなたの強い悲しみを感じさせ
あなたと共に悲しませてください

私の心を燃やしてください
神なるキリストへの愛で、
その御心になうように

聖なる母よ、どうかお願いします
十字架に架けられた（御子の）傷を
私の心に深く刻みつけてください

あなたの子が傷つけられ
ありがたくも私のために苦しんでくださった
その罰「苦しみ」を私に分けてください

あなたと共にまことに涙を流し
十字架の苦しみを感じさせてください、
私の生のある限り

十字架の傍らにあなたと共に立ち
そして打ちのめされる苦しみを

あなたとともにすることを私は願います

いと清き乙女のなかの乙女よ

どうか私を退けずに

あなたとともに歎かせてください

どうかキリストの死を私に負わせ、

どうかその受難を共にさせ、

そしてその傷に思いを馳せさせてください

どうかその傷を私に負わせてください

どうか私に十字架を深く味わわせてください

そして御子の血を

怒りの火に燃やされることなきよう

あなたによって、乙女よ、守られますように

裁きの日には

キリストよ、私がこの世を去る時には

御母によって私を勝利の栄誉へ

至らしめてください

肉体が滅びる時には

どうか魂に、栄光の天国を

与えてください。アーメン

それは、甘い永遠のようで「1/2」

窓から入り込んだ柔らかな日差しが心地よい目覚ましになり、薄ら瞼を開いた。瞬間、上部の模様には違和感を覚える。ベージュの板にみみずが張り付き、這い回る姿を描いたような線だが、紛れもなく天井である。ここが、病院である何よりの証しでもあった。

嗚呼、私は産婦人科の病棟の一般室（四床室）にいるのだ。漸く自覚すると同時に言い知れぬ不安から解き放たれ、安堵し、長く浅い溜め息を吐き出した。

酸味を含む爽やかなはずの薬品臭が、嫌に鼻に付く。まだ入院して間もない私に取っては、ますます人様の家であることを印象づけるだけだった。

「コジマさん、血圧を測りましょうね。」

奇麗に染めた茶色い髪を、下辺りに纏めた若い看護師が、優しく声を掛ける。毎朝この時間になると、担当の人が状態を診に部屋を巡ってくるのだ。福々しい笑顔は、さっきまでの憂うつな空想を消して、こちらまで幸せな気分になてくれた。因みに彼女が呼びかけたのは、右上にいる女の患者さんだ。

かと言って、話の流れ等で直接聞いた訳ではない。彼女がいる簡易寝台の前方に、大きく《小島 真由美》と書かれたプラスチック製の札が、貼り付けてあったのだ。

「はい。」

小さな声で返事をしたその人は、簡易寝台の上で上半身を起こした儘、縮こまっている。巡回用の手押し車に乗る器械の数々に、ちらちら視線をやっているも直ぐ視線を外し、なるべく見ないようにしていた。

確か、二十五才まで生きて来た人生の中、初めての入院生活だと聞いている。柔和な顔立ちで、一つに束ねた黒い髪を、茶色のゴムを使い三つ編みにして背辺りまで流している。看護師よりも、若干

長い。何時も、無地の淡いピンク色をした寝間着を着ていた。

これはこの病院で配られる女物の洋服だが、私のように、普段着で過ごす方も少なくない。飽くまで常識の範囲内には違いないが、比較的自由が利く。なのに敢えてこちらを選ぶと言うことは、余りお洒落しゃれに関心がないのだろうか。大人しい人柄の印象を受ける女性だった。

「これは血圧計と言って、小嶋さんの腕にはめると、これを使って
少しだけ圧迫するんですよ。」

看護師は物柔らかにそう言いながら近寄って、鼠色ねずみをした袋状のベルトから、黒い管が伸びた先にあるゴム風船を何度か押し、少しずつ膨らませてみせる。しかし、肝心の当人は、まるでこれからソイツに多大な危害を与えられるかのような鋭い目を向け、身体はますます強張こわばるばかりだった。

ふと、彼女が着ている白衣にぶら下がる名札を見る。春日かすがさんと言うらしい。立ち竦すくむ所か、そっと包み込むようにして小嶋さんの右腕を握り、怯えおびきったその目を真っ直見据える。相手の心中すべを全て見透かしているようでもあり、母のような労いたわりに満ちた純粋さを垣間かいま見たような気がして、私は視線を外せなかった。

外の方がやると態わざとらしい嫌いがある。だが、知り合いの子どもを扱う感じの傲慢しつまんな目線は一切感じられず、行動がどこまでも自然で、上手うまい。

「そう、ですか。」

息を深く吸い込んだ彼女は、吐き出してから、弱々しく頬笑み返す。

「ええ。計りますよ。」

そういう春日さんの顔は相変わらずのほほんとして、少し羨うらやましい。軽く頷き、離れたしなやかな手でベルトを小嶋さんの手首に巻いていく。白衣の天使とは、彼女のためにあると、本気で思った。

私も最初は不安で、何でもない器械にも子鹿こじかのように怯おびえていた。丁度十年前、まだ呼び方が看護婦だうきめうだった頃ころだ。

左肩を何回か脱臼だつぎゆうして、この大学附属病院に手術入院をしたことがあるのだ。まだ、夏の暑い盛りで、太陽の一番照りつける昼下がりが。だが、院内はクーラーが効いているので涼しい。

漸やまやまくりハビリのノルマも終え、前々から練っていた思いつきを実行に移すべく、二階の廊下中を走り回った。看護婦や、長い闘病生活をしている子などへ聞き込みに向かい、資料となりそうな話はある限り集めて原稿用紙に書き込んだ。

勿論もちろん、情報の取捨選択もやり、これから巡るルートも、大人の力を借りて考えた。彼らにしては面白そうな遊びだったのだろう。けれど当時は、誰もが楽しむために蔑ないがしろにしたくない思いが強かった。幼いなりに真剣だったのだ。

そしてスタッフの了承と許可を得たのだが・・・余りお騒がせしないのと、小さい子だけだと何が起るか分からないので、私の母の引率が条件だった。

しかし、動けるとは言え、私も病人。左腕を胴体に付け、胴と肩腕を動かさないように三角巾きんを使って固定している。利き腕じゃないだけ増しだけど、考えれば良くそんなに動くだけの元気があったものだ。

「旅行会社のMAIが企画した、お化け観光ツアー。絶賛予約受け付け中だよ！」

何冊か原稿用紙の簡易本を携え、少し大きめの声で病棟中を呼びかけて回った。勘の良い方は察してくれているだろうが、母が日帰りのプランに良く応募し、バスに乗って色々な県へ連れて行ってくれた。子ども心にも大変嬉うれしく、すらすらとらしいセリフを並べられたのも、その影響だった。

そうこうする内に、興味を前面に表した年下の子達が、少しずつ集まってくる。最初は誰だれでも警戒するが、なぜか、自然と向こうか

ら子犬のように懐いてくれる。

「サキちゃん、今日は何をするんだ？」

生意気盛りのケイタが四人の先陣を切り、目を輝かせて私を見上げる。凄く短い、癖のある黒髪。日焼けと見紛いそうな位に黒い肌は、快活そうなくくりくり目が覗く。

私は呼び捨てにされても気にせず、抱えてある手書きの本を一冊差し出した。彼は少々乱暴に奪い去り、熱心に目を通し始める。小学生一年生でも読める簡単な言葉を並べてあるので、そのまま突き返されることは無かった。

本当に、子どもって不思議だ。今のケイタのようにその素直な瞳で見られて、仲良くなったお互いの病気を、気兼ねなく尋ねる。冗談めかして言わなきゃいけない、と、初めは思っていた。けれど、自分なりに納得したら明日からも普段通りなのだ。

元氣そうな彼も、もう長いこと車椅子生活を送っている。なので、この頃から運転に関しては手慣れた物だった。特に、車庫入れは無駄が無く円滑で感心した。

「まるで子鹿だよ。」

そう思うと、何だか限りなく愛おしくなつて、思わず頬笑む。と同時に、激しい義務感が襲い、その果てしない命の重さが苛む。

私が、彼らの笑顔を命懸けで守らなきゃいけない。最後は、思いう話として語り合えるように。本当は怖いだろうに、サキと言う娘がいるから、安心して付いて来てくれるのだから。

「コジカ？」

そう言つて見上げたのは、カナメだ。黒いトレーニングスーツが映える、ショッキングピンクの糸で細やかに刺繍された“Sweet Friend”の筆記体。まだ幼い顔立ちながら上半分に印象が集まり、下半分は割とすっきりしている。額が奇麗で、きちんと緩み無く直線的に引かれた眉、大きめの澄んだ瞳がこちらを見詰める。

横に並んでみると、ケイタよりも背が一回り高い。周りの子達と比べても無駄な脂肪がない方で、ファッションモデルのように引き締まっている。

それもそうだ。鴉からすのようなしつとりとした長髪に巻かれている包帯は、全国ジュニア柔道大会に向けての練習中に起こった、スポーツ事故による物らしい。少し不器用で、病院のスタッフとは違う人がやったのだと思う。

「見たことない？本物の鹿。」

私はざつと辺りを見渡して、本棚らしき物を探す。そう言える程量が多い訳でもないけど、確か小学生用に作られた動物関係の雑誌はあったように思ったのだ。

何かがずれている。漸く感づき始めた頃、カナメが少し怒ったような顔をして抗議した。と言っても、余り表情豊かな方ではないので良く観察しないと判らないが。

「鹿じゃない、カナメ。」

その小さな頭の上に掌を軽く乗せ、笑う。まだ不満そうな顔だったが、目を瞑ってなすがままだった。ちよつと真面目に受け取る所が彼女らしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7204g/>

廃病棟 ~ Abolition ward ~ 1 s t

2010年10月10日00時57分発行